

第四章 自我問題

第四章 自我の問題

私の存在の極に於ては、私は木の株や石
 と同一である。そこでは宇宙の法則の支配を
 認めねばならない。この一極は私の存在の基
 礎が下の方へ方へと深く横はつてある所の
 である。その基礎の強みは包摂的世界の掌中
 にしつかりと握らるるに在り、
 万物との仲立關係の中心を点に在る。

然し私の存在の他の一極に於ては、私は凡
 事の物と同一では無い。そこでは私は平等と
 云ふ環列を突き破つて個人として孤立してあ
 る。私は絶對的に無類なのである。余は余な
 り。余は比類無し。宇宙の全重量が自命の上
 にのしかかつて来ても、この私の個性を押し出
 し、万物と平等にせしむることは出来な
 ず、私は凡事の物が恐ろしく牽引するに拘ら
 ず個性を維持しつゝある。この個性あるものは
 見掛けは小さいが、實際は偉大なものだ。こ

水個性はその特異性を奪ひ、塵と一ならず、
 人とする諸力に屈しなからざる。この個性は
 この個性は自我の上部構造である。それは
 孤立を誇り、全宇宙に一つも複製物を造り
 せぬ。無二の個性。考へ方に定型を与へしこ
 とを誇り、測り知れぬ基礎の深さと暗さとから
 出で、空中に立つておるのである。若し、
 この個性と云ふ上部構造を取り毀すならば
 必、その時には材料は一つも失はれずとも、
 原子は一つも破壊されずとも、個性の中に水
 晶の如く結晶して輝いておる創造の成りは無
 くなる。若し我々がこの特質、即ちこの個性
 を剥奪すれば、我々は絶対的に無一物
 となる。個性は己が物と呼ぶ得る唯一の物で
 ある。しかし大抵を認めながら、それは失へば
 全世界に於て損失となるものである。個性が
 最も価値ある所以は普遍的であるから故であ
 る。故に個性を通じてのみ我々は自命の特異
 性を意識せねば宇宙に抱かれざる場合より
 一層更に宇宙に我物をなす得る。普遍的な

のは、常に無比なるものの中にその完成を求め
 一、ある。己が無比と云ふこととを一つくり定
 全の儘にして置かざると云ふ預ひは、真に自己
 の裡に御ける普遍的なるもの願ひなのであ
 る。自己に對する我々の与へるものは
 己が裡に在る無限者の我々のである。
 人百が己の自我の分離を最も貴重を財産を
 と考へることは、自我のためには苦痛を嘗め
 一、罪を犯すことによつて証明される。然し
 己と分離しておくと云ふ意識は、分離と云ふ
 智慧の實を食つたことに由来する。分離とい
 ふ意識は人百を恥、罪、死に導いた。然し、
 一、小は自然の子宮裡に自我が全く無邪氣に、
 安んじてまどろみ臥しておる如何なる樂園よ
 りも人百にせり一層大切なるもののである。
 自我の分離を維持し行くには、我々は絶え
 ず努力をし、苦しまねばならぬ。そして、實際
 この自我の價值はこの苦しみに計るのである
 。自我の價值を一面では犠牲が示して居り、
 その犠牲は損失が如何程まりしかさ示して
 お

(83)

3。他面では獲得が示して居り、その獲得は
 如何程ふくのかが獲ら小しかを示しておる
 。若し自我が苦痛と犠牲以外。何物をも意味
 しなかつたならば、我々にとつて何の價値も
 持たず得ぬであらう。又我々は決して花んどか
 らる犠牲をなめまいであらう。かゝる場合に
 人類の最高目的は自我の絶滅たらんと云ふ
 ことば少しも疑ひまじきことである。
 然し、若し犠牲に相当する獲得があるなら
 若し自我が空^{くわ}に終らねばして充実に終ら
 ず、その時に自我の消極的性質、自我の苦しみ
 や犠牲は却つて自我を貴重なるものたらしめる
 ことは明かである。自我の積極的意義を明か
 に悟り、熱心に自我に対する責任を引受け
 ひるむることなく犠牲をなめねば人によつて
 まこと必然りと認明されないのである。
 上述の序論を以てす小は、印本人は自我の
 絶滅を人類の最高目的と考へなかつたかど
 かへ云ふこととさ、嘗て聴衆の一人が私に質
 問し、左が、これに答へることは容易である。

先づ第一に、人々のほごく些細な事柄以外自

分の思想を發表する際に、決して思想通りで

ないといふ事實を記憶せねばならぬ。人間の

言葉はたしかも言語にならぬ。その言は暗示

の聲の手裏にすなわち。人間の言葉は暗示

はすゝか、思想を表現する。その人間の思

想が重なるればなる程、その人間の言葉は、

生活と云ふ前後関係によつて説明せられぬ

らなく、なつて来る。辞書で引いて人間の意

を知らずとすゝる人々は、唯、形式的に家に到

達

するわけがある。この水、その人々は外壁に

よつて止まらば水、玄關への入は見え出し得

ぬからである。この水、我々の最も偉大を予言

者の殺へが、我々が水を生活に実現すること

によらぬかして、言葉は出ることには、つて理解

せんと試みる時、陥りなき論争を起す所以を

のどある。言文に忠なる頭と云ふ方能に禍を

おこす人々は、絶えず網に北殺す水で、

漁

漁りをする不幸な人々である。

佛敎や耶敎の諸宗敎の場合のみならず、キ

(84)

リスト教に於ても、無私無怨の理想が極め
 熱心に説かれ、小く知る。キリスト教に於ては、
 死のシニナルは、眞なる生命から人なるを救
 ふと云ふ觀念を表現するたみに使用されたる。
 此小はニルバーナ、(87)涅槃即ちランカの燼滅のシニナルと同
 様である。

印文特有の思想では、人百の眞の救済は、
アサナア (86)無明からの救済である。これを張られ、積
 極的であり、眞美である。如何なるものも破
 壊する。これと、尤も此小は不可能なる故に

一 である。消極的なるもの、我々の眞理
 の目増え、好むもの、破壊する。これである。
 この無明なる好む物が取去られる時、その時
 にのみ眼瞼が、好むもの、小くあり、その小は眼
 に一つ、何ぞ交換せざる。い。
 我々の自我が、そのまゝで眞なること、自我
 は、小く知り、完全な意味を保持して知る。これ
 考へしむるもの、は、我々の無明なるのである。
 我々が自我に一つ、い、かゝる誤小る考へ方を
 する時、我々は自我を生位の究極の目的とする

るが如き方法で生活を試みるのである。その
 時、我々の運命は、丁か道の埃にしがみつき
 て目的地に達せんとする人の如く、失望と云
 子ニとに決まると知る。自我は我れを止め置
 く所等の方法も持ち合せない。此自我の本
 性は逃れ去り行くことであるから也。そして
 人生の織機を通り抜け、ある自我の糸に
 才なることによつては、我れは糸が織り込
 小る布と云ふ目的に糸を役立たしむること
 出来ない。人百が入念に心して自我享楽の
 配正する時、火を附けられたパンを粉
 王持たすので、火は燃え上り、次第に消え
 る。丁か自命の子王食を殺し、死人で行く不
 自然な獣の如くである。
 未知の子の言葉は高圧的に目立つ。その
 言葉は我々の足を停めるが何れ我々に言つて
 あり。言葉のこの足枷から救はれる左めに
 は、我々は我々の無明アジライアから逃れねばならぬ
 。その時に我々の頭は内的思想にその自由王
 見出すであらう。然し我々の王法は無智は、

言葉の破壊によつてのみ一掃されること云へば
 馬鹿げたことであらう。そつとなくして、完全
 に覚えるのと凡そ言葉は在るべき所に停まり
 、我々を左の言葉に未縛するのみであく、言
 葉を超越しめ、内的思想に等くのである。こ
 れ即ち解脱である。

かくて我々をして自我はそれのみを目的と
 りと思はしめ、又、自我はその限界を超越さ
 思想を言ひぬがう。我々の考へを妨ぐるこ
 とによつて自我を足枷とらしむるものは、唯

アウダア
 無明

(89)

アウダア
 無明

(90)

から逃れしめて自由にせよ。汝の眞の畫を
 りて汝を逃れする自我の把握より救はれし
 と来り言ひ理由である。

我々は自己の最も眞なる本性を達する時自
 由を得る。芸術家は人々自分の芸術の理想
 を見出す時、芸術的自由を見出す。その時、
 芸術家は骨折つて模倣を企てることかから脱却
 し、一般人の賞讃を刺戟から脱するのであ
 る。宗教の本令は我々の本性を破壊すること

できなくて、充実するにすぎない。

サンフランシスコ

梵語のダルマは普通、宗教と英訳されるが

、我々の玉座では一層深い意味を持つてゐる

。ダルマは凡そ物の最奥の本性であり、精

神であり、含蓄が浅く本意のまゝである

。ダルマは我々の自我の裡に働かざる最

高目的である。休むも悪いことか為す時

には、我々はダルマが侵すことか云ふ。その

意味は、我々の本性に背いたことか云ふことを

然し我々の裡の本意のまゝなるダルマは内

在せるが故に明かに見えまい。見えまいから

罪深いことか人々の本性と考へられ来る。

そして神の特別の恩寵によりてのみ特別の人

々が救はれ得ると考へられ来る。これは種

子の本性はその殻の中に包まれ、こゝで

こゝでであり、こゝが木に成長し得るは或る特

別の奇蹟によつてのみであること云ふに等しい

。然し種子の外観はその眞の本性に矛盾して

ゐると云ふことか解らなまいか。諸氏が種子を

化学的分析に附する時、その中に炭素、蛋白

質、其他多くの物質を見出し得やうか、枝を
 張る木と云ふ考へは見おすまい。唯、木が形
 を取る時にのみ、このダルマを見らば、
 この時に世中で無駄に成る腐らした種子
 はこのダルマと云ふ点で、即ちその眞の本質
 の実現と云ふ点で妨げられて来たことと疑ふ
 もなく断言し得る。人類の歴史に於て、我々
 は自身の存かゝる生きた種子が萌芽するのを知
 つて知る。我々は自己の存かゝる偉大な目的
 が即ちの最も偉大なる人々の生涯に具体化す
 るのを正見と来た。そして結果のあがらぬ指に
 思はれる多くの個人的生活があるが、存厚実
 在は確かなまい。ごゆるりとかゝる本質ダルマでなく
 、個人的生活は自らの殻を破つて自らを力強
 い霊的の若枝に変へ、空気に走るの中に伸び
 て行く、四方八方に枝を張り出すおぼやうな
 のかと確信した。

種子の自由はその本質ダルマの到達、即ち木と云
 う種子の本質と運命とに到達するにと在る
 。その種子に限り牢獄であるものは、本實現

(92)

(93)

である。物によつて以つてその充實を達する
 犠牲は、死に於ける犠牲ではない。それは自由
 を得るための絆を放棄することである。

我々が人々の持つ自由と云ふ最高の理想を
 知る時、我々は人々の本性ダルマ、人々の本質の精
 粹、人々の自我の眞義を知り。一見、人々は
 、これに必よつて以て自己満足と自大との無
 限の機会を得る自由と看做して居るやうであ
 る。然しこのことは、了史により確証され
 る。印教の天啓を説く人々には

、常に自己犠牲の生活を送つた人々であつた
 。人々に於ける高尚な性質は、常に、自らに勝
 たり、高且つその最深の眞理である。何物か
 を求めるのである。その何物かは高尚な性質を
 凡て犠牲にするに必要とするが、しかるに
 の犠牲はそれ自身ダルマの報酬とするのである。こ
 れが人々の本性ダルマであり、人々の宗教である。

我々は己が自我を二つの異なりする方面より

見得る。自ら正見せむらかす自我と、自ら正
 超越し、これ水によつて自らの意味を啓示する
 自我とごあり。自ら正見せむらかす左めに自
 我は大存らんと試み、財産蓄積の台上に立左
 んと試みる。更に、凡このもの。正自らの所
 齋らんと試みる。自ら正啓示する左めに自
 我は正の持つる凡この物も捨てる、かくて蓄よ
 り咲き出づる花の如く完全になり、その美の
 杯から凡この芳香を注ぎ出すのである。
 ランポには油が容れられてある。ランポは油を
 しかり把んで安全に持ちこたへ、些か水漬
 小ぬ指に守つておる。かくして、ランポは周
 圍の凡この物から分離せられ、各階に在る。然
 し、灯がともる直ちに、ランポは正の
 意味を見出す。遠近に在る凡この物との関係
 は確立せられ、ランポは借し氣もよく油の貯
 へは焰を養ふために犠牲にする。
 かゝるランポは我々の自我ごあり。ランポ
 がその所有物正貯へる限り、自ら正時として
 置く。その行ひはランポの眞の目的と矛盾す

る。ランが照明を見出す時、瞬時に自ら
忘る。光を高く掲げ、持てる凡ての物を以て
光に役立てるのである。これにランがの
啓示は存するからである。この啓示は佛陀が
説いた自由である。佛陀はランがの油を
放棄するにせよ。然し、目的は放棄は
佛陀も意味せしめし。一層暗い貧困である。
ランはその油を主に放棄せねばならぬ。か
くしてランがの貯への中に持てる目的を
自由にせねばならぬ。これに解脱である。
佛陀の指示した道は単に自己犠牲の實行のみ
でなく、妻の振大である。この中に佛陀の教
への真義がある。
我々が佛陀により説かれる涅槃の状態は妻
によるものではない。二と知る時、我々は確か
に涅槃は妻の最高位にある。これを知る。こ
れ妻はこれのみで目的であるからである。凡
この物は我々の頭の中に「所故」の質問を
起す。そして我々は「理由」を求め、然し
我々が「余は妻す」と云ふ時、「所故」は妻

するやしと理由を問ふべし余地は幸い。妻は唯しこれ水むけで最佳の答である。

成程、利己心より人言に放棄することを主張

する。然し利己的を人言は強ひらるれば放棄

する。丁かこれ水は未熟の果実を食ふが如し

山のてある。これは木からこれ水は取らば枝

を傷めぬ所を知らぬ。然し人言が妻する時、放

棄する。これは人言にひとり歎氏の二である。

丁か、熟し左果実を木が何の惜し氣もなく譲

与する。如き山のてある。我々の財産の凡そ

は、利己的の欲望に繼ぐがみか水て重くなる。

我々はこの水は容易に放棄する。これが出来ず

い。この財産は我々の本性に属する。手に見え

る。皮の皮膚にして我々に膠着してある。

これ水て之を引放すと血が流る。然し我々が妻

に取憑か水てある時は、その力は反対方向に

作用する。我々にしり膠着してある。

は、この膠着と重みとを失ひ、我々は此等の

財産は自命の物である。これを知らず、

放棄する。これは損失どころである。我々は

我々には

の中に自己の本性の充実に見出すのである。
 かくて我々は完全な善の中に自我の自由を
 見出すのである。如何程よく苦痛を惹不起す
 うとせよ、善のためにならば、善のたれに自由
 に存せしむるのである。それ故、善のたれに働
 くことは行動に能う自由である。これが一
 人の説く仕事をすうに無私無怨たるの救へで
 ある。

りぬ。これ行動に能うのみ我々は自己の本性
 によりては云ふ。我々は行動しなげれば
 正しく現するからである。然し、この表現は我
 々の行動が自由である限り完全ではなない。更
 際、我々の本性は我々が怨望或は恐怖に強制
 され、仕事をする時曇ら下る。母親はその
 子への奉仕に自今を表現する。故に我々の真
 の自由は行動せざることに在らずして、行動
 に能う自由に在る。この行動に能う自由は善
 の仕事に能うのみ達せられ得るのである。
 波 ^ハニ ^ニ神の表現はその創造の業に在る。それ
 尼 ^ニ沙 ^ニ土 ^ニに ^ニ曰 ^ニく ^ニ一 ^ニ智 ^ニ、 ^ニカ ^ニ、 ^ニ行 ^ニは ^ニ神 ^ニの ^ニ本 ^ニ性 ^ニに ^ニ属 ^ニ

すしと。(98) 此等のものは神に外から課せられ
 ものでは存い。故に神の業は神の自由である
 こととし、神の創造物に神は自ら表現する。
 同じことか他の所では、別の言葉で云はれ
 る。万物は散花より生れ、散花により維持
 され、散花に向つて進み行く。散花の中へ入
 り行くこと。(99) 小神の創造物は、必ずしも
 迫られ、造られ、生れ、死す。これは神の散
 花の完全から生れ、創造する。これは神の業で
 ある。故に創造物に神自身の表現があること
 云ふことは、指しておぼろげである。
 自己の芸術的觀念の充実に散花を感ずる芸
 術家は、これこそ具体化し、かくてこそ遠く
 に置かれ、眺めることによつて、一層完全に我が
 物とす。我々自身は、一層完全に自分である
 とする。ために、自分からこれこそ切放し、妻の
 創造物として具体化する。これは散花のどある
 こと。故にこの分離、即ち嫌悪の分離でなく、妻
 の分離は、即ち小神の嫌悪は、唯一つの要
 素、即ち分離の要素を持つに過ぎない。然し

、妻は二つの要素、即ち單に外觀に迫らぬ

離の要素と究極の眞理たる渾一の要素とを持

つ。父親がその子王腕から抛り上げる時、抛

り上げることは排斥するところのやうに見える

が、本意は全く逆であるのと同じである。

そこで、我々は自我の意味は神及び其他の

のからの分離に見出さるべきでなく、
瑜伽 (98)

即ち融合の絶えざる實現の中に見出さるべき

であり、畫布の白地の側に見出されるべき

くて、絵が畫かるとある側に見出さるべき

あると云ふこととを知らねばならぬ。

ニ マヤー (99) 我々の自我の分離が印度の哲人により

摩耶即ち幻覺と看做される所以である。何故

かあるは、自我の分離と云ふことは何等其れ

自身固有の實在性は持つておかないからである

。今離せる自我は危険を拵に見えぬ。それ

自らの孤立を目が廻る程の高さに等しい存在

の美しい面に陰気な影を投げける。外から見

るは教達的で、破壊的な突然の分離の様相を帯

びて加ふる。それは傲慢であり、横柄であり、

氣儘である。それは瞬時の欲望を満足せしむ
 るために、宇宙の富の全てを宇宙から強奪せん
 ものと構へておる。一日の間、その醜さを飾
 るために美と云ふ神聖な鳥から羽毛の総てを
 奪取せよ、残酷に志し取り取りと構へておる
 人百の伝説にまこと斯く云ふておる。即ち、
 命離せる自我はその額に不従順の黒い印を印
 さしおこすに負ふと。然し、以上のは凡て
 無明を包蔵せる幻覚である。それは霧であり
 、太陽では無い。それは養の火を予示する黒
 煙である。

銀行残幣を持つて居る者には、欲しむものは
 得せざる處が有るは、銀行紙幣の紙である
 と無智故に思ひ居る。戀人をして想像すべし。彼
 はその残を積まねたり、隠したり、凡ゆる種
 類の馬鹿な方法を以て處理したりし、終に根元
 けし、残幣は絶対的に無價値な物であり、火中
 に投ずるにのみ適しておると云ふ。強論に悲し
 くも到達する。然し、賢人は銀行残幣の残はす
 べし。摩耶であり、銀行に渡すは迄は無益か

ものなるニとを知らず。自我の分離が、
 銀行残幣の残の残に、それだけ貴金を
 奪のたれに貸せしむるものほ我々の無明アキラケのみで
 ある。この信念に基いて行動するニとにより
 我々の自我は無価値なるものとす。この自
 我が測り知れぬ程貴い富を持つて来る
 のは、無明が取除かれぬ時のみである。こ
 り神の歡我がとる不死の形の中に神が顯現し
 ておる。これからある。此等の形は神から離れ
 ぬ。これと此等の形は現金に換へるニとに
 我々の形と貴なる最初の歡我が送還する時、
 我々の形に与へた価値に外ならぬ。我々此
 等の時に銀行で此等の形を現金に換へるニとに
 なる。それと此等の形の眞姿を見出す。
 人より強然たる必要に迫られ、仕事をする
 時、仕事は一時的、偶然的性質を帯びる。そ
 れは學ぶる一時の習い合せの手配となる。又
 別の必要が起さる時にそれだけ捨てる。壞
 小を儘放つて置かぬ。然し、人々の仕事は歡
 我の残果である時、それだけ形は不滅の要

素を持つ。人言に於る不滅なるものが人言の仕
 事に自ら永久の性質を与へる。神の歡喜の形として自我は不死で
 あり。ニ小神の歡喜は永久アムリタム (107)であるから故に死
 の事実が疑ひ得ぬ時では、我は死して死に疑
 ひを抱かざるは、我の裡に在るこの自
 我は不滅なりとの事実である。我の裡の此
 の矛盾を調和せんとして、我は生死の二元の
 中に調和があるといふ子眞理に達する。表現に
 於ては有限であり、生命の根本に於ては無限
 である。靈の生命は無限なるものを実現する
 途上に於て死の門をくゞらねばならぬといふ
 ことと我は知る。一元的のものは死である
 。それと生命を有するもの。然し生命は二元的
 である。眞実と外觀(103)とを有する。死は生に離る
 可からざる隨伴物たる外觀であり、幻マヤ覚である
 である。我は自我を生ずるために形を絶え
 ざる変化と成長とを經ねばならぬ。この二
 とは換言すれば同時に進行は断絶の死と
 不断の生とあるといふ。我々が死

在快諾するを拒み、自我の形に依り固定的な
 無變化と与へんと思ひ、自我が成長して自我
 を脱するに促す所等の衝動を感ぜず、自我
 が自らの限界を最終のものとして看做して、その
 に行動するのには真に死を拒くことである。そ
 こで、この死に平氣に當り、この師の命令
 に来る。弛滅への命令は、永久の生命に
 対する命令である。この命令は朝の光りの中
 にランゴの光を消すことである。太陽の降去
 では、命令は自我の本性の奥底に持つこと
 である。最も神聖な預望王意識的に実行するこ
 とは、預望王の命令である。

自我は自己の存在の中に二組の預望王有一
 つ居り、それは調和せんと我々を努力する。

我々の物質的性質の領域には、我々が常に意識
 して居る一組の預望王がある。我々には飲食を享
 受せんと望む。我々には肉体的快楽と安樂とを
 切望する。此等の預望は自己本位である。此
 等は夫々の衝動にのみ心を寄せる。我々の味
 覚の預望は胃が許すものと往々相反する。

然し我々は、全作としこの肉作の致望であり
 平常意識しておき、他の一組の致望を持つ
 ところ。これには健康の致望である。これは改
 善し、癒し、不良徴候の場合に新し
 い調節をまし、且つ均衡が破られる時には器
 用には均衡を恢復せしめ、乍ら仕事をしておるの
 ところ。健康に対する致望は、我々の刻下の肉
 体的致望の満足に心を寄せ、現在を超越
 せ、彼方に行つておる。これは肉作の全作事の
 振下である。これは我々の生命を延ばし、未来
 へと繋ぎ、且つ生命の部分を統一を維持す
 る。賢明なる人は、これを知り、他の肉作的致
 望を、これと調和せしめる。

我々は社会作を、一層大なる肉作を持つ。
 社会は有機的組織作である。我々は部令とし
 て、これに、対し、個々の致望を持つておる。我々
 は、自らの快樂と、放恣とを、欲する。我々は、他の
 誰よりも、ゆ、私、ふ、に、と、久、く、し、て、得、る、に、と、久、く、し、て、欲
 する。このこと、から、奪、ひ、合、ひ、と、争、ひ、と、必、然、起
 ず、る。しかし、社会の一員として、この我々の存

在の奥底に御く別の欲望が我々には有る。こ
 小は社会の福祉に對するもの。こは
 目下の利己的なるもの。限界を越える。こ
 は無限なるもの。味方である。こ
 賢明なる人は自己満足を求め、欲望を社会
 善を求め、欲望と調和せんとする。かくるの
 みその人は自己の高尚を自我を實現する。
 その有限なる相に於て、自我は自らの分離を
 意識しておる。こして凡この他人より以上の
 優越を保持し、企て、無慈悲である。然しこ
 の無限なる相に於て、自我の欲望は、自我を完全
 に等し、する自己増大に等しかる調和を得
 ることである。こ
 我々の物質的性質の解放は健康を得ること
 であり、社会的存在として、の欲望は善を得る
 ことである。自我の欲望は善を得ることであ
 る。この最後のものは佛陀が絶滅とするもの
 即ち利己心の絶滅である。この利己心の絶
 滅が善の本分であり、
 菩提(106)即ち心覺の到達である。明

の最上の實現に一時は背を向けることは出来
 るが、全然それから自らを切放すことは出来
 ない。これ、すなわち自ら自我意思は自らの意
 味と失ふからである。我々の自我意思は或程
 氣遣自由なものである。道から強ひて
 外れることの何れもかまわり得るが、然し何
 時迄もその方向に進み續けることは出来ない
 。これ、我々には我々の消極的側面に於ては有限
 であるからである。我々には自己の要行を止め、不
 消極的形の可能性を保持するべきである。我々には
 消極的自由を達するに先立ち、放任する自由の
 或る程度に於て、独立と反抗とを通つて、究極の定
 の過程に於て、独立と反抗とを通つて、究極の定
 達するべきである。この調和は強制によつては決して到
 の自己本性を経て調和的な靈の到達に到るの
 我々の自我の移行行は、孤立してある自我
 の中には示して笑はるべきである。

一致の怪丁を止めねばならぬ。こゝは悪は無
 限びなく、不一致は本来目的であり得ぬから
 だ。我々の意思が自由なるは、意思が自らの
 真の道は善と悪とに向つてあることとを發見
 し、且つこゝを實行せんがためである。こゝ
 善と悪とは無限であり、無限に於て始めの自
 由は完全に實現し得るからだ。こゝは我々の
 意思は自我の限界に向つては無く、こゝは
 幻覚であり、不存在である所に向つては
 なく、無限に向つて、真と善とのある所に向
 つて行つて自由なることとが出来る。我々の自
 由は自らの自由の源に逆らひ尚且つ自由であ
 り得ぬ。自由は自殺し尚且つ生れることとは
 来ない。我々は我と我身を足枷と縛する左
 に無限の自由を持つべきは云ひ得ない。
 こゝは足枷をすくこととは自由を亡ぼすから
 だ。その拵は我々は意思の自由に於ては、生
 の場合と同じく、外觀と真実との二元を持
 つのである。我々の自我意思は自由の外觀に
 於て、我々が自由の本質の姿である。我々がこ

(107)

の外觀を眞の姿から切り離すと試みる時、
 この企ては不幸を拒否、結局は無効果なるこ
 とをま更むとすることになる。凡この物は絵姿と
 サッティヤム
 眞姿と(108)の二元を持つのである。言葉が単に音
 びあり、有限である時にはマイヤである。
 それが思惑びあり、無限である時にはサッティヤ
 ムである。我々の自我が學に個的であり、有
 限である時、即ち我々の自我がその分離を絶
 対のものとして看做す時、我々の自我はマイヤ
 びあり、その精粹は普遍的なもの、無限なもの
 、最高の自我パラマーシトマンに在ると認め
 時、我々の自我はサッティヤムである。キリス
 が、「アブラハムの生れ出でぬ前より吾は在り也
 L(109)と云つ左のはこの意味である。この自我は
 私の中に在る自我の口を藉りて語る永遠の自
 我(110)である。個人的自我は無限の自我の中に浸
 つて、調和の自由を實現する時完全となる。個
 人的自我の解脱(111)はこの時である。即ち摩耶、
 換言すれば無明から生ずる外觀の奴隷たるこ
 とから個我が救はれるのである。その時に、

眞実の中に於る完全な休息、善の中に於る完
 全な活動、⁽¹¹³⁾ 意の中に於る完全な融合⁽¹¹⁴⁾に於て個
 我が解放すべし。
 單に我々の自我の中ののみならず、高又、自
 然界にも神からの二の分離はあり。そしてこ
 の分離は即ち、哲人により幻^{マヤ}覺と看做すべし。
 東左。此の分離は他物と無関係に存するもの
 ではない。又、神の無限性を外縁から制限し
 ないからである。神の意志に制限を加へれば
 神自らの意志である。丁度、此は棋客が駒を
 動かすことに因り、自分の意志を制限する時
 と全く同じである。棋客は自ら進んで各特定
 の駒と明確な関係を築く。そして此等の制限
 によつて、自分の力に依りての歡喜を實現する
 。此は棋客の好むまゝに駒を動かすことであ
 る。出始めから進むとき、若し彼が好むまゝに動
 かし、行くなら、將棋はありえぬからである。
 若し神が不能の役目を引受けざるは、その
 時に神の創造は終りを告げ、神の力は乏しく、凡
 この意義を失ふのである。此の力が力たる左

めには制限内での御かねばならぬからである。
 神の水は水でなければならぬ。神の土は土以
 外では決してありえぬ。此等の土や水
 とませる法則は、よつて以て棋客から神が将棋
 を離した神自身の法則である。こゝれの中
 棋客の歡喜が存するからである。
 法則の制限によつて自然が神から令離す小
 り如く、その操は自我から令離するもの
 は、自我の利己心が加ふる制限である。神は自
 らの意志に盡くご制限を加へる。そして我々
 自身の小さい世界に對する支配を我々に委し
 てる。こゝれは丁度父親が幾らかの小遣ひを子に
 与へ、その範圍内では子が自分の思ふ通りに
 するは自由なるが如きものである。尤もその
 小遣ひは父自身の財産の一部のまゝであるが
 、父親はこゝれが自分の意志の作用を委ねるや
 りにしてある。その理由は妻の意志であり、
 又小故に自由である父の意志は他の自由を意
 志と孩令して始め、散喜を持ち得るからであ
 る。奴隸を持たねばならぬ暴君は、奴隸を自

己の目的の左めの道具と看做してゐる。自己
 の私利心を絶対的に安全ならしむる左めに奴隷
 から意志を押し潰し去すものは、暴君自身の少
 量の急識である。この私利心は他人の最小の
 自由も我慢するにせよ。暴君は己の奴隷に真
 自由をやらざらば故である。暴君は己の奴隷に真
 に頼つてゐる。故に奴隷を自己の意思の字を
 る手段とするにせよ。完全には有用にせんと
 と試みる。然し、暴君は自己の意志を實現す
 る左めに二つの急志を保持せねばならぬ。こ
 意の抑致は調和であり、自由と自由との調和
 であるからである。この抑に我々の自由を形と
 へ左神の意は自我と神から分離して、
 今離により再び調和を確立し、神と我々の自
 我と我の附けるのは神の意志である。こ
 我々の自我が無限の更新を怪ねばならぬ所以
 である。依故にならば、自我の分離の経歴のま
 へは自我は永久に進行するにせよ。出来な
 からである。今離は自我が自我の無限の源へ
 度々戻つて行くのには邪魔にならざる有限である。

我々の自我はこの不滅の青春を實現するため
 に絶えずこの老齡を投げ棄てねばならぬ。
 再三再四、忘却と死によつてその制限を脱
 却せねばならぬ。(114) 自我の個性はこの個的
 命を常に恢復するために、始終普遍的なる
 のに没入しなげねばならぬ。實際、毎瞬時、
 普遍的なるものを潜り抜けず来なければならぬ
 自我は永遠のリズムにいつて行かねばならぬ
 ため。そして一歩毎に振動的の統一に觸れねば
 ならぬ。かくの如くにして、美しく、強く平
 衡を保ち、今離れ維持しなげねばならぬ。
 生と死との遊戯を我々は到る處で見かける
 。——この古きもの、新しいものへの変化を
 日は朝毎に雲霧をく、白く、花の採に新鮮
 に我々を訪ねる。然し、我々はその古きニと
 正知一つみある。日は水亭に古きものがある。そ
 の日は新生の大地を腕に抱き上げ、芝の白子
 外套を蔽ひ、星宿の弓の巡礼に送り去しを極
 く古き日である。
 然し日脚は疲れ、その眼は霞まぬ。日

は老いゝるこゝたふ永久の護符を持てゐる。
 この護符に觸ルゝと、全この敵は万物の敵か
 ら消之失せり。世界の心臓の核心に不滅の青
 春がある。死と衰微とは宇宙の表に瞬るの
 影を投けて逃げ去つて行く。それ小は足跡を
 久しル残す事ない。それ小は眞なるものは新鮮で
 若々しい姿を止めぬ。それ小は古々古々日は朝毎に繰返
 我々の地球のこの古々古々日は朝毎に繰返
 し再生する。それ小はこの音楽の最初の疊句へ
 帰るのである。若し日の行進が無限の道程の
 行進である。換言す小は、若し日か底知
 小ぬ夜の闇へ跳込み、涯しなす初の生命に於
 て操返し再生す。小はあの恐ろしい休止か
 づを奪はば、その時には日はこの塵埃で次
 に眞なるものまほし。埋めて、その重い足取
 りで地球の上を弛ゆるなす痛みを振げらる。あ
 らじ。その時には、毎瞬時か疲りの重荷を投
 げ残して行く。それして老衰が永久に埃をらけ
 を玉座に哀臨するをらじ。
 然し、毎朝、日は新しく咲き出む花のり

に、死が永久に死んで行く、擾乱の波は唯々表
 面だけのことであり、静寂の海は測り知れぬ
 広大な山のまじりのおなじ傳言を再び語り、
 おなじ保証を再び新にして再生する。夜の幄
 幕は川家せられ、永遠の生命は着物に一点の
 埃の汚点をなく、歎に老齡の皺をしに出て来る
 。
 あらゆる物の存する以前より在る神は今
 日も同じである(119)と云ふことを知る。創造の歌
 の一々の音は神の聲から刻々に新らに出て来
 る。この宇宙は家を放浪者の如く、空から
 空へ反響する字まゝ山を(121)はきい。――万物
 の朦朧たる初めに於て、こゝれは最後として歌
 はれ、それから孤児として残す小石を古い歌
 の山をひきはきい。毎瞬時、宇宙は神の心から
 出て来る。宇宙は神の呼吸から吐く出てく小石
 のひびきである。
 として神が刻々に宇宙を創造しつゝあるこ
 とが、丁度思ひが背に具作化する様に宇宙が
 空に拡がり、且つ決してその累贅する重みで

落ちて粉砕し去りて清玉所以である。そこか
 らばこしなき変異と云ふ驚くべきことか由來
 する。人智では説明し得ぬことの到來、個
 のはこしなき行列も其處に由來する。し
 くの個性の一人は創造物に於て酷似物
 を持つ。最初に於る如くこの存に最後
 なる迄、始りは決して終るものではない。
 見れば世界は常に古くして、常に新し
 自我はその生命の毎瞬時に再生すれば
 らぬと云ふことと正知らねばならぬ。自
 己に死す背負はせ、自我を老齡に見えし
 去る左めに
 迷⁽¹²²⁾恐る自我は押破つて去るれば
 こ小生命は不滅の青春であり、生命は
 運動を妨げ人と試みる老齡を厭ふ故
 である。
 老齡は實際には生命に属し、こ
 めるのどは
 くる、唯、影がランパに伴ふ如く生命
 に伴ふこと
 来るものどあるが。
 我々の生命は海の掬にその岸を打つ。
 二ル
 は岸に生命が岸に閉込められぬこと
 を見

(124)

(123)

出すをめぐりて、海に向つて、
 小が涯しき
 く、南通し、
 ちめぐりある。生命は、
 一歩、一歩に、
 その律を
 打つ詩の如きものあり。律を打つのは律の
 八釜し、規則によつて詩が黙ら
 下小るをめぐり
 なく、
 詩の佳調の内的自由を表現する
 へるをめぐりある。

我々の個性の限界の壁は、
 一方に於て我々
 正自己の限界内に交り、
 他方に於て我々
 正無限に向つて導いて行く。我々が此等の限

界正無限をらしめんと
 試みる時に(125)始め、我々
 は、途方もない矛盾に
 投込まれる。そして不幸
 にも失敗を招くのである。
 この試みは人類の歴史に於ける
 大革命の要因
 である。部令が全作を足蹴に
 して、自分の令を走
 路を走らんとする時は、
 何時でも、全作の偉大
 な牽引力は部令に激しい
 急撻を与へ、突然止
 まらせ、そして粉々に
 砕かす。個人が絶
 えず下流小をめぐり、
 世界全作の力の流小を
 堰止め、
 自分一個の使用に
 便する場所の中に閉込めて

(126)

流ルしめまい時に、いざ此部分に不幸王
 振く。とんなきに王が力強くとも、渾一である
 力の無限の源に好して、救護王を翻して尚且つ力
 強くあることは出来まい。
 僂波ラバニシエニヤトに曰く、「不忠によつて人々は柔
 之、欲する物を得、敵に勝つ得る。然し所詮
 ての人は根柢から切離すべからず我滅に会ふの如く。
 上(127)と。我々の振は若し我々が人格の偉大さを
 達せんと欲するならば、普遍的なものの中に深
 く下りておまければ存らまい。
 この場合を求めるとは我々の自我の目的
 である。我々の自我は善と従順との心持ひを
 の頭と低く垂れ、おまければ存らぬ。そして
 偉大なるもの、小なりもの、凡そこのものが
 会ふ所に居るべきもの、小なりもの、自我は
 損失によつて獲得し、小なりもの存らぬ。そして
 放棄によつて向上し、小なりもの存らぬ。若し子
 供が遊戯して母親の許へ帰ることか出来なければ
 小なりもの遊戯は子供にとつて恐ろしいこと
 であらう。そして我々の個性の誇りは、もし

我々如きの中に、
己あらじ。我々の中
に、己を放棄し得
ねば不幸の種
永之に美しく、且
つ我々の自我に、
唯一の意義
を与へてく小の
は、我々に病
小無限
看の、不現のみ
ごあること、
知らねばならぬ。

L